

「わたしの言葉は滅びない」

2014年11月11日

マルコによる福音書 13章 28節～31節。「いちじくの木から教を学びなさい。枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことが分かる。それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。はっきり言うておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

上記の記述は意味が分かり難い。いちじくの木の新緑の季節の移り変わりを終末の到来時と結びつけている。子どもの頃、育った我が家の庭には、いちじくの木があり、実たいちじくを美味しく食べた。いちじくの新緑の季節、夏になる。誰にでも分かる季節の移り変わりである。「それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい」と言うが、悟れない。「これらのことが起こるのを見たら」は、夏が近づいたいちじくの新緑の季節のことではないだろう。まして、人の子・キリストの再臨が戸口に近づいていることなど、悟りようがない。それでも、マルコ福音書の著者は「はっきり言うておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」と断言する。

「これらのことがみな起こるまで」は、大いなる苦難の後、太陽と月は光をなくし、星が落ちる天変地異が起こり、人の子・キリストが力と栄光に満ち、雲に乗って来る世の終わりの裁きの時までを指すのであろう。その時までには時代は滅びることなく、苦難が続く。

しかし「天地は滅びるが、わたしの言葉は滅びない」と言う。天地の滅びはどのように来るのであろうか。人間の飽くなき欲望が地球を痛めつけている。貧しくさせられた人々の貧しさによって、地球は支えられていたが、人は皆、豊かさを求める。豊かさはエネルギーを消費する。温暖化は進み、異常気象が頻発している。核汚染は広がり続けている。人類は間違いなく破滅に向かっていようだ。もっと大きなスケールで言えば、宇宙は膨張し続け、太陽系は消滅に向かっていよう。天地の滅びは確かなことである。

著者は、そのような滅びを言うてはいない。「黙示」表現は一字一句に意味を持たせて読むことはできない。「わたしの言葉は決して滅びない」ということを明言するために、他の言葉は修飾語として用いられている。主イエスが語った世の終わり、終末が到来するという言葉は確実で、信頼すべきであると言い、信仰において「アーメン」と唱和することを求めている。

紀元前6世紀、バビロン捕囚から解放された時、第二イザヤは「草は枯れ、花はしぼむが／わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ」と高らかに宣言している。新約聖書のペトロ(一)1章24節には、第二イザヤの言葉を引用し「人は皆、草のようで、／その華やかさはすべて、草の花のようだ。草は枯れ、／花は散る。しかし、主の言葉は永遠に変わることがない」と書いている。この言葉は迫害に苦しむ人々を励ます意味であった。両者は「神の言葉」、神が人間を愛している事実は永遠に変わることがないと言っている。

マルコ福音書の著者は「わたしの言葉は決して滅びない」と書いて、終末の到来が確かであることを信仰を持って受け入れなさいと促している。この終末を待つ信仰が神信仰の核心で、ここに、望みを持って生きる愛と勇気の源泉がある。

救いの完成の日を信じることなく、どうして今の苦難に耐えて生きることができようか。